

西洋医学の受容過程と近代地域医療の発展
—東海地域における医師たちの活動をてがかりに—

Acceptance process of Western medicine and development of modern community medicine
—Based on the activities of doctors in the Tokai region—

宮崎学園短期大学 黒野伸子
Miyazaki Gakuen Junior College Nobuko Kurono

名古屋大学 石川 寛
Nagoya University Hiroshi Ishikawa

就実短期大学 大友達也
Syujitu Junior College Tatsuya Otomo

要旨

幕末から明治維新は、医学の西洋化が急激に進んだ。西洋医学を基盤とした医療政策が整えられ、新医療の受容が進み、医学教育が整備された時代であるともいえる。その契機となったのは、伝染病流行と赤痢蔓延であった。国は、衛生制度の整備に力を入れ、同時に、国民に衛生に関する教育を施していった。新医療の受容には多くの困難があったが、明治30年代には、初等教育に「衛生」「公衆衛生」の概念が取り入れられるまでになった。明治4(1871)年に長与専齋が欧米視察で、「衛生」の概念を知り、普及の必要性・重要性を痛感してから実に30年近くの歳月が流れていた。

衛生観念の乏しかった時代、新医療の導入には、多くの人々の活躍と相克があったが、地域に根差した医師達は「在村医」として患者に赴いて診療を行い、時に衛生指導、栄養指導、種痘の啓発や実施なども行いながら新医療の啓蒙を行った。同時に地域の知識階級が指導者として医師の教えを守り広め、経済的な支援とともに、地域医療を側面から支えていたのである。明治後期には各地に医療機関が設立され、現在に近い医療体系が形成されていくのであるが、このような活動が根底にあったことは注目に値する。

本稿は、新医療の受容過程を医療提供者の視点から考察し、近代地域医療の形成過程を明らかにすることを主な目的とした。対象地域を岐阜県を中心とした西濃地域とし、比較対象として愛知県知多地域を選定した。その結果、新医療の受容には「西洋医学の受容は明治40年代にはほぼ完了し、地域住民の信頼を得ていた」「西濃地域の医学教育を担っていた好古堂は、附属医療機関を持ち、実務に即した教育を実施していた」「医師同士の交流は積極的に行われており、常に最新医学の情報収集に努めていた」等の特徴があることが示唆された。

今後、資料の翻刻・解説とともに資料の統合を遂行し、近代地域医療の形成過程を明らかにしていきたい。

1. はじめに

幕末から明治維新は、医学の西洋化が急激に進んだ。西洋医学を基盤とした医療政策が整えられ、同時に医学教育が整備された時代であるともいえる。その契機となったのは、1877（明治 10）年のコレラをはじめとする伝染病流行と、明治 20 年代後期の赤痢蔓延であった。国は、衛生制度の整備に力を入れ、同時に、国民に衛生に関する教育を施していった。竹原（2006）は、医療政策の数度にわたる展開は、「新医療導入をめぐる相克と克服の過程」であると述べている。竹原は、「新医療」という用語について、「明治期に新たに導入した〈衛生〉も含めた意味⁽¹⁾」で用いているが、本稿でも竹原に依拠し、当該用語を用いることとする。

新医療の受容には多くの困難が待ち受けていたが、明治 30 年代には、初等教育に「衛生」「公衆衛生」の概念が取り入れられた。明治 33（1900）年発行尋常小学校の教科書には、「祈祷や儀式等による治療が無効である」ことが明記されており、長谷川（1995）は、この点を高く評価している。当時の死因は主に細菌感染によるものが多く、感染予防が喫緊の課題だったからである。明治 4（1871）年に長与専斎は欧米で医学・医療分野を視察し、初めて「衛生」の概念と普及の必要性・重要性を痛感した。長与の思いから実に 30 年近くの歳月が流れ、やっと国民に「衛生」の概念が浸透し始めたのである。

しかし、衛生観念の乏しかった時代、新医療の導入には、多くの人々の活躍があった。その代表的な例として、地域に根差した「在村医」という医師達の存在がある。彼らは患者に赴いて診療を行い、時に衛生指導、栄養指導、種痘の啓発や実施なども行っていたが、地域住民の拒否や不理解もあり、相克と克服が繰り返されていた。しかし、同時に地域の知識階級が教導者として医師の教えを守り広め、経済的な支援とともに、地域医療を側面から支えていた（図 1）。明治後期には各地に医療機関が設立され、現在に近い医療体系が形成されていくのであるが、このような活動が根底にあったことは注目に値する。

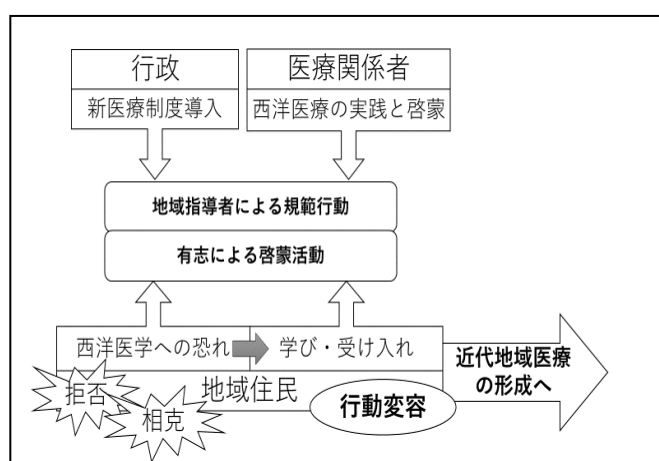


図 1：近代地域医療形成概念図（筆者作成）

2. 研究目的と使用史料、用語の定義

本稿は、新医療の受容過程を医療提供者の視点から考察し、近代地域医療の形成過程を明らかにすることを主な目的としている。西洋医学を基盤とした医療活動に貢献した医師とその周辺の人々に焦点を当て、新たな医療体系に発展していく過程を考察するものである。対象とする地域は、岐阜県を中心とした西濃地域とした。

3. 使用資料と用語の定義

考察に使用した一次資料は以下の通りである。

① 小寺家文書

岐阜県大垣市所蔵「小寺家文書」衛生医療に分類された約 100 点のうち、当主小寺弓之助とその家族で書き継いだ「小寺家日誌」を中心とした文書群である。小寺家文書は岐阜県大垣市の旧家小寺家に伝来し、大垣市が所蔵する 8937 点に及ぶ資料群である。小寺家は、美濃国石津郡時・多良郷(現在の岐阜県大垣市上石津町域)を支配した旗本高木家の旧家臣の家筋にあたる。文書は、石川(2012)が目録を作成・編集し、近代の衛生や医療に関する資料約 100 点を「5 家族」中に「(3)衛生医療」の小項目を設けて細分した⁽²⁾。効能書や処方箋、種痘証明書、診療明細書、富山の売薬商や婦人病薬に関する資料、家庭薬報、受診券などがあり、年代が判明しているもので明治 7(1874)年から昭和 21(1946)年に及ぶ。

② 医学生の日記

現岐阜県各務原市桐野にあった医塾好古堂の塾生であった馬淵良三の書き残した日記である。その一部を天野晴子(1988)が『明治の医塾生-馬淵良三日記』を私家版として出版している。明治 26(1893)年から約 50 年に渡る生活が端正な文体で綴られているが、医塾生としての貴重な記録が多く残っており、西濃地域の地域医療を考察する好資料である。

③ 広報誌

美濃加茂市が発行している『広報みのかも』には、地域に貢献した人物が取り上げられている。そのうち、昭和 61(1986)年 1 月号には、旧岐阜県加茂郡太田町の在村医だった座間金太郎が取り上げられている。

次に、本稿で用いる用語の定義をここにまとめておきたい。

① 在村医

厳格な定義はなされていないが、本稿では地域医療を担う医師全般をさすものとする。西洋医学の啓蒙を行った医師の名称として「啓蒙医⁽³⁾」「宣教医⁽⁴⁾」などがあるが、これらは、医学界全体を大きく変えていく目的で活動した医師であるため、本稿では当該名称は用いないこととした。

② 新医療

幕末から明治期にかけて導入された西洋医学を基盤とした医療全般をさすものとする。本用語は、竹原が定義したように、「衛生」を含めた意味を持つ。

4. 在村医の行動と地域への影響

4-1. 多良村における西協家の活動

西脇家は、近世には美濃国石津郡時・多良郷（現在の岐阜県大垣市上石津町域）を支配した旗本高木家に仕え、近代には在村医として地域医療に従事した¹⁾。主家であった旗本高木家は、西高木家・東高木家・北高木家の三家からなり、いずれも多良郷宮村に陣屋を構えた。西脇家は多良郷宮村（多良村宮）にあり、友輔が東高木家の侍医を務めた。

宮村の庄屋の家に生まれた西脇友輔とその兄秀挺（はじめ秀策）は、共に大垣の蘭方医江馬家の門人であった。江馬家は大垣藩医の家柄で、蘭斎（延享4〈1747〉～天保9〈1838〉）が江戸で蘭方医学を修業、帰垣後に蘭学塾の好蘭堂を開設した。蘭斎後は松斎（安永8〈1779〉～文政3〈1820〉）、活堂（文化3〈1806〉～明治24〈1891〉）と続き、多くの医者育てた²⁾。秀挺は天保6(1835)年、友輔は天保15(1844)年に江馬家に入門した。秀挺は医師の許可を得た後、岐阜に住み、嘉永年間（1848～54）に岐阜種痘所を設けて美濃における種痘の実施に尽力した。西脇家に残る種痘録³⁾をみると、嘉永7(1854)年5月から8月にかけて、上石津町域にあたる地域で82人の小児に種痘を実施していることが確認できる。

東高木家の侍医を務めた友輔は、維新後は多良で医療に従事し、明治20(1887)年に死去した。家督は長男の耕太郎が継いだ。耕太郎は明治13(1880)年6月に岐阜県医学校を卒業し付属病院に勤務していたが、父が亡くなると「友輔」と改名して村医となった。明治9(1876)年に天然痘予防規則が制定され種痘が義務化する中で、西脇友輔・耕太郎（友輔）も種痘医として活躍した。『新修上石津町史』には「種痘医 西脇友輔」が発行した種痘接種証明書の写真が掲載されている（p.575）。これは明治15(1882)年頃の証明書と思われるので、西脇友輔のものである。一方で、近世に西高木家に仕え、西脇家と同じ多良村宮に住む小寺家には、「医師 西脇友輔」が発行した種痘接種証明書5通が伝わる⁴⁾。これは明治23, 26, 30年の証明書なので耕太郎（友輔）の時代である。小寺家の当主弓之助は天然痘が流行した明治30(1897)年に妻・長女と共に臨時接種していたが、彼は生まれた年にも種痘を受けていたことが前出の種痘録に記されている。

小寺家の日誌によると、明治41(1908)年2月21日条に「本日社務所ニ於テ種痘執行ニ付家内一統種痘ヲ為シ賞ヒタリ、其掛員ハ医師西脇友輔、区長代理西脇佳美、書記岡田長平ノ三氏ナリ」とあり、同月29日条にも「本日社務所ニ於テ種痘ノ点検ト共ニ「トラホーム」ノ検診アリタルニ付家内一同出頭、西脇医師ニ検診ヲ受タリ」との記述がみえる⁵⁾。このころの多良村の伝染病対策は西脇友輔が担っていたようである。西脇友輔（耕太郎）の次男が郁で、岐阜県医学校を卒業後、多良村宮で在村医となった。前出の小寺家の日誌には、明治41(1908)年12月8日条に「西脇郁氏医術開業ニ付其祝トシテ金五十銭携帯ニ行キ饗応ヲ受ケ折詰ヲ貰ヒ来レリ」とあり、西脇家が地域に根差した在村医であったことがわかる。弓之助長女が明治41(1908)年に虫垂炎で入院した際も、大垣の総合病院（吉益病院）を紹介しており、現在の病診連携が行われていたことも推測される。詳しくは、黒野・石川・大友（2020a,b）を参照されたい。

4-2. 好古堂を中心とした桐野村周辺の地域医療

各務郡桐野村は、現在の岐阜県各務原市那加桐野町付近にあたる地域である。当地に、医師大野春道が主宰した医塾好古堂があった。大野春道は弘化2(1845)年の生まれで、父玄通は華岡青洲の門人で、代々医家の家系であったようだ。春道は大垣藩江馬春齡(4代活堂)に入塾し、西洋学を学んでいる⁶⁾。好古堂の開塾がいつであったかは、今後の研究に俟たねばならないが、塾生馬淵良三が入塾したのが明治20(1887)年であったから、少なくとも明治中期には岐阜地域での医学教育を担い、地域の信頼を得ていたと推測される。春道が江馬から西洋医学の薫陶を受けていることから、大野家が早い時期から新医療の価値に気づき、その普及に貢献したことは明らかである。

好古堂には大野医院(明治37<1904>年に大野病院と改称)が併設されていた。塾生はすべて住み込みで、春道の夫人が生活の面倒を引き受けていた⁷⁾。入院患者を常時6、7人抱えており、塾生は当直医の役割も果たしている。好古堂は大野医院(大野病院)とともに、基幹病院として地域医療を支えるのみならず、教育病院としての機能も十分に備えていたと考えられる。本稿では、好古堂に学んだ座間金太郎と馬淵良三に関する記録から、当該地域での新医療普及の様子を考察する。

座間金太郎は、明治2(1869)年に生まれ、明治19(1886)年に薬舗開業試験に合格し、薬剤師となった。その後、済生学舎(現慈恵会医科大学)に学び、医師免許取得後は大野病院の医師となった。明治36(1903)年、太田町に座間医院を開業した⁸⁾。馬淵良三は明治7(1874)年に生まれ、明治20(1887)年に好古堂に入塾した。2年後の明治22(1889)年には、座間と同様、薬舗開業試験に合格した後、済生学舎に学び、明治33(1900)年に帰塾した。その後、1908(明治41)年に木曾川町黒田(愛知県一宮市)で馬淵医院を開業している。入塾が同じ時期であったこともあり、二人は懇意にしていたようで、馬淵の日記には「座間兄」という呼称が散見される。

大野医院(大野病院)では外来診療を実施しており、1日70人から80人程度の外来患者の診察を実施していた。当時、診察は患家で行うことが一般的であったから、往診も多かった。日記の記載から、片道8里(約32km)を人力車に乗って往診した、とあり、医師の少ない時代を反映している。外来診療と往診の両方をこなさなければならぬため、塾生の代診も普通に行われていた。電気治療や患者家族への感染予防の指導なども塾生の役割であった。夜には丸薬の製造も行っていたことが記録に残されている。一方、最新の医学技術を吸収するために、常に医学書の書写やノートのとめなどを行っていた。地方都市であるにも関わらず、彼らがレベルの高い医学教育を受けていたことが、馬淵の日記からも読み取れる。明治35(1902)年には好生館⁹⁾から医員を招き、最新医療の講義を受けている。同時期に春道の長男啓一郎が東京帝国大学を卒業して大野病院の院長となった。彼らは新医療の先駆者としての学びを地域に伝導していたのである。馬淵が帰塾した頃から、春道、座間とともに診療の中心的存在となっており、多忙な毎日であったようだ。医院も常に満床で、新医療が当該地域に定着していたことが窺える。

明治中期から後期にかけては、新医療の受容が急速に進んでおり、会計も現金支払いが定着しつつあり、地域の医会(現在の医師会)が制定した料金体系に則って、明朗会計が実施されていた。しかし、支払いのできない貧しい家も多かった。座間が開業してからのエピソードをいくつか拾ってみよう。「人物みのかも」の記事によれば、薬代は

盆暮れ勘定だったようであるが、支払いのできない患者には一切請求しなかったようだ。大野春道と同様、遠方への往診、夜間の往診も厭わなかった。馬淵の日記からも同様であったことが読み取れる。新医療受容の陰には、「医は仁術」の基盤があり、地域の信頼を勝ち得ていったことを忘れてはならない。

5. 医療機関・医師たちの連携

前項では、西脇家、大野家を中心として、新医療受容の様子を考察したが、他の地域にも特筆すべき医家がいくつかある。表1、表2は現時点で可能な限り集約したものである。

現愛知県新城市信玄原には代々の医家である牧野家が「信玄病院」を開設している。3代目文齋が明治42（1909）年に信玄病院院長に就任している。牧野は、医療のみならず、地元の名士として地域の文化発展にも寄与しており、東三河地域の新医療受容に大きく関わった人物である。

岐阜県大垣市には吉益家がある。1700年代に活躍した江戸時代の代表的な漢方医である吉益東洞（はじめ東庵）、南涯を祖とする医家の家系である。東洞は、元禄15（1702）年安芸国山口町（現広島県中区付近）の生まれで、江戸時代における古医方最大の医家である⁽⁵⁾。後に京都に移り住んだ京都吉益家を継いだ今井鉄太郎（吉益四峰）が雄太郎の父親である⁽¹⁰⁾。

雄太郎は、京都府立医学校（現京都府立医科大学）で外科を専攻し、母校で教鞭をとったのちドイツに留学し、帰国後の明治41（1908）年に岐阜県大垣市で吉益病院を開いた。雄太郎の弟良蔵も、京都府立医学校を卒業し、郷里（津原）で開業している。雄太郎の長男脩夫（しゅうふ）は後に犯罪生活曲線を開発し、犯罪学・精神鑑定の嚆矢とされる人物として知られている⁽⁶⁾。

表1：岐阜県私立病院（抜粋）（大正15〈1926〉年現在）
出所：岐阜県編集（2002）『岐阜県史』p. 627より筆者作成

病院名	所在地	設立年	院長名
林病院	郡上郡八幡町	明治36年7月	林 吉蔵
郡上病院	郡上郡八幡町	明治39年4月	田中健吉
大野病院	稲葉郡那加村	明治38年8月	大野啓一郎
高山病院	大野郡高山町	明治45年7月	千葉泰一郎
中津川病院	恵那郡中津町	明治45年7月	平尾 猛
岐阜病院	岐阜県金宝町	明治31年3月	渡邊柳吉
多治見病院	可児郡豊岡町	明治45年3月	奥村鐵太郎
小坂病院	岐阜県秋津町	明治39年6月	小坂慶二
吉益病院	大垣市竹島町	明治41年5月	吉益雄太郎
回天病院	土岐郡土岐津町	明治12年12月	遠山道榮

表 2：東海地方の地域医療を支えた医家と活動地域（筆者作成）

家筋	敷設 教育機関	医療機関	関係人物 (教育を受けた機関)	活動地域
大野家	好古堂	大野医院 大野病院	大野春道 (好蘭堂) 大野啓一郎 (東京帝国大学)	岐阜県各務原一帯
江馬家	好蘭堂		江馬蘭斎 (天真楼か?)	岐阜県大垣市一帯
吉益家		吉益病院	吉益雄太郎 (京都府立医学校)	岐阜県大垣市一帯
西脇家		西脇医院	西脇友輔・郁 (不明)	岐阜県大垣市上石津地域一帯
座間家		座間医院	座間金太郎 (好古堂・済生学舎)	岐阜県美濃加茂市一帯
馬淵家		馬淵医院	馬淵良三 (好古堂・済生学舎)	愛知県一宮市一帯
牧野家		信玄病院	牧野文斎 (不明)	愛知県東三河地域一帯

前項でも少し触れているが、表 3 に挙げた医療機関や医師たちが情報交換や病診連携をとっていたことが窺える。大野啓一郎と吉益雄太郎は懇意な間柄で、吉益が開業した際に大野が新病院を訪れ、診察室等の見学を行っている。大野が東京帝国大学の学生であった頃の講義ノートの写しなども入手しており、お互いに情報交換をしていたようだ。大野春道は好蘭堂の出身であり、江馬家との繋がりも深いと考えられ、広く西濃地域の医療コミュニティが形成されていたのであろう。

吉益雄太郎は、小寺弓之助の長女が虫垂切除術を受けたときの執刀医である。管見の限りでは、吉益病院を紹介した人物は西脇友輔である可能性が高い。小寺家日誌明治 41 (1908) 年 8 月 12 日の条 (図 2) には、「西脇友輔方へ薬価トシテ四円四銭ト謝礼五十銭、都合四円五十四銭支払タリ」とあり、小寺弓之助の長女が吉益病院を退院した後の外来フォローアップを西脇が担当していることが推測される。西脇

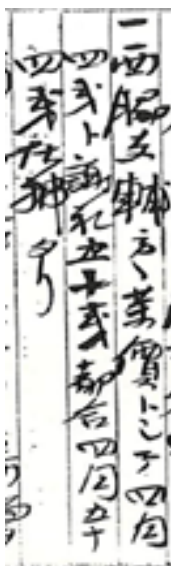


図 2：小寺家日誌（部分）

明治 41 (1908) 年 8 月 12 日条

に支払った五十銭は、吉益病院を紹介してくれた謝礼ではないかと思われる。

西脇家は、小寺弓之助宅にほど近い土地に居を構えており、地域のホームドクターとして地域医療を支えていた。後に息子の西脇郁が開業するまで、診察室は持っていなかったようだ。馬淵、座間の両名もそれぞれの地で地域医療を支え続けていたが、好古堂（大野病院）を中心とした交流が続いていた記録が馬淵の日記に残されている。

6. おわりに

本稿では、現在確認できる限りの医療関連資料を参照しながら、「医家」の視点から新医療の受容過程を考察した。その結果、新医療の受容には以下の特徴があることが示唆された。

- 1) 西洋医学の受容は明治 40 年代にはほぼ完了し、地域住民の信頼を得ていた。その成功の陰には、医師達のボランティアが大きく影響していた。
- 2) 西濃地域の医学教育を担っていた好古堂は、附属医療機関を持ち、実務に即した教育を実施していた。病診連携、紹介（診療情報提供）も行われており、それにより地域医療ネットワークが形成されていた。
- 3) 医師同士の交流は積極的に行われており、常に最新医学の情報収集に努めていた。その結果、地方であるにも関わらず、先端医療が実施されていた。

しかしながら、残された資料だけでは、考察できないことも多く、推測の域を出ていない部分もある。今後も、資料の翻刻・解読とともに資料の統合を遂行し、近代地域医療の形成過程を明らかにしていきたい。併せて新たな資料の検索を進めていく予定である。

注

- 1) 以下の記述は、『新修上石津町誌』（上石津町教育委員会、2004 年）、pp. 196～199、pp. 572～578 および『上石津町史 通史編』（上石津町、1979 年）、pp. 383～384 を参考にした。
- 2) 『大垣市史 通史編 自然・原始～近世』（大垣市、2013 年）、pp. 884～886
- 3) 『上石津町史 史料編』（上石津町、1975 年）、339 号文書
- 4) 小寺家文書（大垣市教育委員会蔵）13-24～28
- 5) 小寺家文書（大垣市教育委員会蔵）6-4
- 6) 以下の記述は、「明治の医塾生 馬淵良三日記」http://blog.livedoor.jp/amano_kiyoko、2022 年 3 月 25 日取得及び天野晴子（1988）『明治の医塾生-馬淵良三日記』の記事を参考にした。
- 7) 春道は若くして最初の夫人を亡くしており、『明治の医塾生-馬淵良三日記』に登場するのは後妻（前妻の妹）である。気丈な人だったようで、塾生からは「女将軍」と呼ばれ、頼られていた。
- 8) 旧岐阜県加茂郡にあった町である。1954 年（昭和 29）年にいくつかの町村が合併し美濃加茂市となった。

- 9) 詳しくは記載されていないが、佐賀藩の藩校であった「好生館（現佐賀県医療センター好生館）」の医局員を招いたと思われる。
- 10) 吉益四峰は、天保 4（1832）年の生まれ、吉益復軒門下となり、のちに娘さだの婿となって吉益家の家督を継いだ。

引用文献

- (1) 竹原万雄（2005）「近代日本における新医療導入をめぐる相克と克服」医療科学研究所『医療と社会』15 卷 3 号、p. 37
- (2) 石川寛編集・解題（2012）『小寺家文書目録』大垣市教育委員会、名古屋大学附属図書館、pp. 394-399
- (3) 中山沃（1998）「明治初期の啓蒙医家森鼻宗次」日本医史学会『日本医史学雑誌』第 44 卷第 2 号、p. 188
- (4) 山田みどり（2018）「幕末・明治初期の宣教医の活動－宣教医へボンを中心に－」日本福祉大学『社会福祉学』第 58 卷第 4 号、p. 1
- (5) 館野正美（2004）『吉益東洞「古書醫言」の研究－その書誌と医学思想－』p. 3
- (6) 森納（1982）「吉益四峰（今井鉄太郎）の家系について」日本医史学会『日本医史学雑誌』第 40 卷第 4 号、p. 126-127

参考文献

- ・青柳精一（2011）『近代医療のあけぼの』思文閣出版
- ・天野晴子（1988）『明治の医塾生-馬淵良三日記』私家版
- ・石川寛編（2012）『小寺家文書目録』名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
- ・石川寛（2019）「近代における高木家文書の調査と活用」名古屋大学『名古屋大学附属図書館研究年報』（16）、pp. 36-25
- ・井上淳（2004）「幕末期在村蘭方医の医療と社会活動：清家堅庭の足跡（第二部 蘭学の地域的展開と交流）」国立民俗博物館『国立民俗博物館研究報告』第 116 集、pp. 127-154
- ・江藤文夫（2019）『医療と日本人』医歯薬出版
- ・江馬春熙（1884）『訓解普通生理学』丸屋善七刊
- ・大垣市上石津文化財保護協会編（2018）『資料が語る里山の文化』
- ・小関藤一郎（1970）「明治期における医師の倫理」関西学院大学『社会学部紀要』No.20、pp. 1-10
- ・熊川寿郎、森川美絵、大冨賀政昭、大口達也、玉置洋、松繁卓哉（2016）「地域社会処方箋の可能性」国立保健医療科学院『保健医療科学』Vol. 65 No. 2、pp. 136-144
- ・黒野伸子、石川寛、大友達也（2020）「小寺家文書にみる明治後期の地域医療（1）－日誌から読み解く患家の医療行動－」日本レセプト学会『レセプト論考』第 2 号、pp. 2-16
- ・黒野伸子、石川寛、大友達也（2020）「小寺家文書にみる明治後期の地域医療（2）」

- 一明細書から読み解く明治後期の医療費一」日本レセプト学会『レセプト論考』第2号、pp. 17-36
- ・坂井健雄（2019）『医学教育の歴史 古今と東西』法政大学出版局
 - ・塩原佳典（2017）「明治前期における公立病院の興亡ー長野県松本地方の医療環境をめぐる「公」の行方ー」国際言語平和研究所『研究論叢』第89号、pp. 1-25
 - ・谷川恵一（2013）『言葉のゆくえ』平凡社
 - ・辻下栄一編（1984）『上石津の人物史 明日を拓いた人々』上石津町教育委員会
 - ・中島陽一郎（2005）『病気日本史』雄山閣
 - ・西沢いづみ（2019）『住民とともに歩んだ医療 京都・堀川病院の実践から』生活書院
 - ・堀崎嘉明（2014）「近世東阿野村の医家三田氏ー医療と文化交流の姿」日本福祉大学『知多半島の歴史と現在』（16）、PP. 117-129
 - ・福井敏隆（2004）「幕末期弘前藩における種痘の受容と医学館の創立」国立民俗博物館『国立民俗博物館研究報告』第116集、pp. 75-90
 - ・美濃加茂市（1986）「人物みのかも9 座間金太郎〈医は仁術〉を貫いた人」岐阜県美濃加茂市『広報みのかも』1月号
 - ・宮前健太郎（2020）「明治初頭における公衆衛生をめぐる啓蒙に関する一考察ー小新聞の投書欄に着目してー」筑波大学『社会学ジャーナル』（45）、pp. 73-86
 - ・森誠（2020）「信玄台地の巨人 牧野文齋」愛知教育文化振興会『教育と文化』
 - ・矢数道明（1969）「跡尋社長 吉益四峰の業績について」日本医史学会『日本医史学雑誌』第15巻第3号、pp. 39-40
 - ・吉益雄太郎（1930）「急性腹膜炎療法ノ批判」京都帝國大學醫學部外科整形外科學教室『日本外科宝函』7、pp. 632-661

謝辞

研究に対する多くの示唆をいただいた現小寺家当主小寺登様、ご家族様、文書閲覧を快く許可して下さり、研究遂行に関し終始ご協力くださった上石津郷土資料館各位、大垣市教育委員会各位、各務原市歴史民俗資料館各位、設楽原歴史資料館湯浅大司館長に感謝するとともに、厚く御礼申し上げます。また、現代医療の在り方についてご教授いただいた藤田医科大学消化器内科学 I 尾崎隼人医師に感謝するとともに厚く御礼申し上げます。

本研究は科研費（22K00866）の助成を受けたものである。